

(飯田) 確かに法規を厳守するため、人為力では絶対不可抗力の様な場合でも、考慮しないこともある。法規は守れるものであつて始めて意味があると思いますが

(大村) 取締りの基本は条件にあります。

2 鯨の東西回游とその資源

渡瀬節雄(大洋漁業株式会社)

筆者は先に鯨研通信1963年12月号に鯨の東西回游論と題して私考を述べたが、抑々鯨が東西回游をするのではないかと考えるに至つたのは、大凡次の諸点からによるものである。

- (1) 南氷洋に於ける鯨資源の減少
- (2) 長年の探鯨(鯨漁場調査)の経験
- (3) 日本近海に於けるイワシクジラ、マッコウクジラの棲息海域別の相違
- (4) 日本近海に於けるマッコウクジラの定性的定量的群構成の相違
- (5) マッコウクジラの東西に於ける棲み分け
- (6) 帆船捕鯨時代のマッコウクジラの捕獲状況
- (7) 日本近海その他に於けるマッコウクジラの生態的相違
- (8) 日本近海その他に於けるイワシクジラ・マッコウクジラの漁期
- (9) 熱帯海域に於けるマッコウクジラの漁期
- (10) マーキングの結果

以下各項に就いて概略説明を加えてみる。

- (1) 南氷洋における鯨資源の減少は南極大陸を取り囲む前線上に鯨が棲息し、前線に沿つて東西に回游しているからで、一番南の前線であるバックラインの鯨は長年の捕獲努力に依つて減少し(此処には勿論国際捕鯨条約に定める制限体長により仔鯨は残つているわけであるが、之さえいなくなつたという事はソ連船団の多数の捕鯨船によつて風潰しに捕獲されたことにより、完全に絶滅したものと思われる。)この為漁場は次の前線であるS55~60度附近に移り、之も年々の捕獲により減少し、南氷洋捕鯨存続の危険状態が叫ばれる今日の事態に至つている。残された漁場は暴風雨圏の北縁に当る前線で、此処が終ればS40度以北は母船式捕鯨禁止区域になつているから南氷洋捕鯨に終止符が打たれるものと推定している。この様に南氷洋の鯨資源が減退して行つたのは、この海域に於ける鯨の主なるものが夫々の前線に沿つて東西回游をしているからと考えられる。
- (2) 探鯨船に乗つて長年漁場調査をやつていると必ず気の付くことであるが、例えば鯨群を発見すると船団長は南北に魚道ならぬ鯨道を探り出せと命じて来るが果して彼の指令通り南北に探鯨して鯨を多く発見し、魚道を把握し得たことがあるであらうか。寧ろ発見は南北より東西に多いのが常である。之は明らかに鯨が東西に回游しているからで、事実船団の捕獲

状況をもても南北より遙かに東西が多いわけである。私の経験からでは鯨は必ず前線に沿つて棲息しているという事と、前線附近でも餌の集約される発達した前線附近に鯨が多く集り、前線の弱くなるにつれて、その群は疎らに拡がって行くという事である。

- (3) イワシクジラは日本近海では親潮前線の発達と共に多く来遊し、ニタリクジラは黒潮前線の発達と共に沿岸に接近して来る。之は之等の鯨が夫々自己の適心し得る範囲内の水塊内で索餌分娩生殖を繰り返している為で、特にニタリクジラが混合水域内に少ない事は、余計にその事をはつきり裏付けているものと云えよう。マッコウクジラに於いて北海道側と三陸側で夫々相異なる前線によつてはつきり分けられているが、最近の資料によつても、

黒潮前線域	19.9%	@ 8.8頭	(註) @は一群当り平均群構成
親潮前線域	69.4%	@ 13.6頭	頭数を表わす
混合水域	10.7%	@ 16.6頭	

となり、マッコウクジラは前線によつてその系統や資源を異にし、前線に沿つて回遊しているものと考えている。

- (4) 日本近海のマッコウクジラを定性的にも北海道側では若年群は多少みられても三陸側では殆んど見られないし、逆に独身群は三陸側に多い率を示している。ハーレムは北海道側が断然多く且つ1群中の構成頭数でも三陸側より平均20%多い。この事は暖海域ではハーレムの形成力が弱い事即ち餌の生産性が低く且つ集約され得ない場合が多い事を示している。更に定量的にみると、北海道側では Shoals が主体で全体の40%近くを占め、次いで Herds であるのに対し、三陸側では Pods が60%近くで、その次が Shoals で Herds は Single より少ない。斯くの如く両海域ではつきり差のある事を表わし、前線による系統の相異も示している。

(註) Single 1頭の場合を云う。

Pods or Small herds 2頭以上10頭未満で1群を形成する群

Shoals 10頭以上20頭未満で1群を形成する群

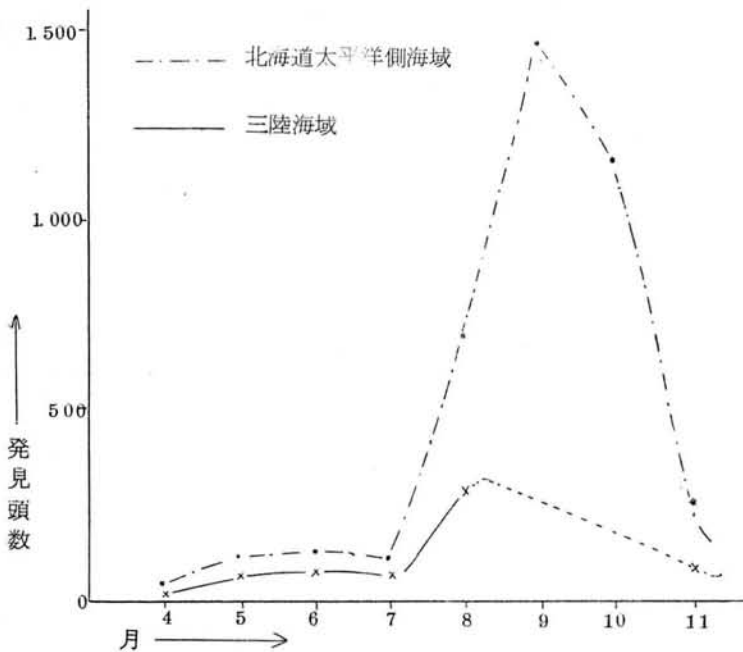
Herds 20頭以上で1群を形成する群

- (5) 日本近海でも大型のマッコウクジラは沖合より地方寄りに多いが千島近海では更に之がはつきりしている。チリー・ペルー・エクアドル近海でもフンボルト寒流が沿岸強く洗うので地方側に大型マッコウクジラが多く、沖合に小型マッコウクジラやハーレムが存在している。この様に東西に於ける棲み分けは、その食性に関する処の棲息海域の選択を意味すると共に東西に分布回遊して事を示すものと考えられる。

- (6) Townsend の1751~1922年間に於けるアメリカ式帆船捕鯨の捕獲図を見て先づわかる事はマッコウクジラの捕獲分布が東西に広範囲に亘つており、南北には特定の海域以外少ないという事である。之は特に熱帯圏に於いて顕著であり、次いで高緯度地方である。

現在捕鯨の行なわれている北洋でも南水洋でも同様である。北太平洋でもN 40～50度中心に東西に多く、印度洋でもS 30～40度間に発見が多い。之はマッコウクジラが東西に前線上を主体に棲息分布回遊している事を如実にあらわしている証拠である。

- (7) 日本近海で捕獲されるマッコウクジラをみても解るところであるが、北海道側のものは体色に黒味が多いが、三陸側では茶色が強い。そして追尾すると沖合のもの程沖合へと今来た方向に逃げる。南や北に逃げるものは特定の場所以外殆んどない。又追尾して賢いのが暖海のものであり、温順なのが寒海のものである。又、暖海では同性同型の群は賢く、小型のもので賢いが、寒海ではハーレムは温和であり、小型のものも同様である等生態的にもけつきり相異が見られる。
- (8) 日本近海のマッコウクジラの漁期を此処数年間に於いて見ると図の如くなつてゐる。之は発見頭数によつて操業度を換算して出したものであるが、之により解る事は4～6月は北海道三陸両海域共殆ど同じ程度の発見で漸次発見頭数が増して行くが、7月に入ると両海域共若干減少する。之はこの時期が梅雨期であり又濃霧期に當る事と、漁場の交代期に當る為であると思考される。そして北海道側では8月以降急激に鯨の来遊が上昇し9～10月に最高に達するが、三陸側では8～9月に最盛期になり、11月に入り両海域共減少して行くこと



マッコウ鯨の日本近海に於ける月別発見頭数 (捕鯨船5隻による年間平均)

がわかる。この事は黒潮前線の発達が8月に最高になり、親潮前線が9、10月に急激に発達するからであろう。そして此處で注目しなくてはならぬことは両海域共殆んど漁期を同じうし、盛漁期を同じうしている事で、この事は漁期の一致により夫々別の系統の鯨が来遊している証拠を表わし且つ前線の発達が最高に達する時に盛漁期を迎える事を意味している。このような点からも両海域のマッコウジラは何れも前線に沿って東西回遊をしているものと考えられるわけである。

- (9) 赤道周辺のマッコウジラの漁期は周年である事は良く知られているし、又両極地方でも冬でもこの鯨が見られるというから、この鯨種に関しては世界中どの海域でも殆ど年中みられるようである。只季節によつて多い場所と少い場所が移動しているわけで、この事からもこの鯨が東西回遊をするという考え方は肯定し得るところである。
- (10) イワシクジラやナガスクジラでは特に南北回遊をしているかの如き印象を与える海域があるが之は大陸や島嶼等によつて広く形成された湾状の場所等でのみみられる事である。又標識の結果をみて標識時と再捕時の間を直線で結んでみると南北回遊をしているように見えるが5年も10年も経過しているものを直線で結ぶ事そのものがかしいのである。長い年月を経ればその間に海況も大きく変化していようし、アブノーマルなものの中にはあろうし再捕率も勿論問題にシなくてはならない。短期間のもものでは全て東又は西に於いて(標識位置から)再捕されている。海流系、大きな水塊という事を考えに入れれば恰も南北回遊をしているかの如き誤つた見方は是正されるものと思う。

以上述べたる如く鯨の回遊はサトウクジラの如き雑食性の特殊なもの等数種を除いては全て東西に棲息回遊の場を持つているものと考えられる。鯨が東西回遊をしているが故にこそ母船式捕鯨の行なわれる南氷洋や北洋の鯨資源は絶滅一步手前の危機に曝され、日本近海や南阿沿岸等の根拠地捕鯨は極めて永続性が強いわけである。昨今沿岸国が自国の漁業領海を宣言したり或は距岸200~500哩以内は母船式捕鯨禁止区域として提案するのも、この考えからすれば故なしとしまいと思われる。昨今ソ連の漁業への進出は誠に目覚ましいものがあるが、捕鯨に於いても北洋の4船団毎年出漁は既にカナダ沿岸に迄接近して、最近米英加三国が新しい大陸棚に関する法律を公布し、或は条約に加入手続きをしたことは益々その印象を強くしている。そのうちに日本近海にも出て来る事は明白なところであろうから、日本近海の豊富な鯨資源もソ連船団の手にかかつてしまうであろうし、鯨だけでなく他の魚種に於いても同様であろう。日本近海の鯨が活動的な前線に沿って存在しているだけに憂慮すべきことであると共に、キワダやカツオ、サンマ等一般回遊魚資源に於いても同様東西回遊すると考えられるから尙更である。

鯨の回遊が恰も南北回遊をしているかの如き印象を与えるのは、夏期南北に暖流が強く伸長するから、その時期に鯨が索餌の爲沿岸近く来遊するからであつて、その見方は局部的な為で、

全体として大きく見れば東西に回遊する幅の方が南北に回遊する幅より遙かに大きいわけである。地域的には前線が多少南北寄りに傾くところはあるけれども全体としてみれば東西回遊と考えられるのである。そして鯨の資源や系統の問題を掘り下げて考えて行く時に、更に鯨が東西回遊するという事を考えられて行くべきであると思う。